

リンゴ新品种「麒麟児」

大玉 甘み、酸味好バランス

弘大と静岡大研究

弘前大学は31日、リンゴの主力品種「ふじ」から発生した新品种「麒麟児」が新たに品種登録されたと発表した。ふじと比べて1・5倍以上実が大きく、収穫期が10月中旬と半月ほど早いのが特徴。麒麟児の特徴を研究する弘大藤崎農場の林田大志助教(果樹生理学)は「大玉で甘みと酸味のバランスが良く、将来は全国展開や輸出もできる品種にした」と語った。

(工藤貴光)



9月に品種登録されたリンゴ「麒麟児」。元の「ふじ」より1回り以上大きいのが特徴—10月31日、弘前大学藤崎農場

麒麟児は、鳥取県八頭町の日本梨生産者丸山茂さん(99)が2009年、自身の農園にあるふじの木に大きな実がなっているのを偶然発見。ふじとは異なった形質を持つ品種で、弘大と静岡大学が品種登録に向け、葉や花の特徴などを共同研究した。20年に出願し、今年9月17日付で品種登録が実現した。

品種名は、発見地の同県東部に伝わる伝統芸能「麒麟獅子舞」(国指定重要無形民俗文化財)からとった。麒麟児には「将来性のある若者」の意味があり、食べた若者が大成して欲しいという思いも込められている。

麒麟児の木は、弘大藤崎農場に6本あり、年約600キほど収穫される。今後、

苗木業者と苗木の供給に向けた交渉をする予定。

11月9日には、静岡市にあるスーパー「田子重」下川原店で試験販売を行う。本県での販売時期は未定。

林田助教は「『地域連携で品種登録したリンゴ』という物語性がある。多くの人に楽しみながら作ったり食べたりしてもらいたい」と話した。